

令和7年度 学校評価総括表（林小学校）

1 学校教育目標 人権を尊重し、心身ともに健康で、豊かな人間性と確かな学力を備えた、たくましい児童を育成する。

2 本年度の努力目標

- (1)すべての教育活動の場面で、「学習意欲」の向上と「自ら考える力」「関わる力」を育成するため、全教職員で意思統一を図り、指導方法の工夫改善を進める。
すべての教育活動を通して、教職員の授業力の向上を図る。
- (2)道徳性や社会性を高めるため、体験活動や道徳教育・特別活動を充実させる。
- (3)運動習慣の確立と望ましい生活習慣の形成を図るため、学校体育の指導法を見直し、保護者と連携して食育・健康・安全教育を充実させる。

3 総括表 ※ 評価は5段階（S:大変よくできている A:よくできている B:できている C:努力がいる D:大変努力がいる）

領域	評価項目	評価の観点	自 己 評 価		次年度への改善点等	学校関係者評価 (学校運営 協議委員)
			考 察 (成 果 と 課 題)	評 価		
校 営	開かれた学校	保護者や地域住民への情報発信・連携	「学校は、保護者や地域の方に必要な情報を分かりやすく伝えているか」という設問に対して、約94%の保護者が「とてもそう思う」「そう思う」と回答している。教職員の評価でも100%が肯定的に捉えている。よりよい学校経営を行っていく上で、教職員の共通理解と保護者への周知は欠かせないものである。今年度もほぼ毎日学校ホームページを更新することができた。また、毎月、学校だより、学年だよりを発行し、学校行事や児童の活動の様子などの情報発信に継続的に取り組んでいる。「学校は、様々な取組や行事を通して保護者や地域と連携し、子どもの教育にあたっている」に96%の保護者が肯定的に回答している。	A	・保護者には、継続して学校だよりやHP等で具体的な取組をお知らせし、誰にでも分かりやすい表現に努める。また、保護者へHPの閲覧を促す。 ・縦割り班活動、総合・生活科、人権教育等において、積極的にゲストティーチャーを招き、地域人材を生かした教育活動を実践し、家庭へ啓発していく。	A
	学級経営	一人一人を主人公にする学級経営の実践	88%の児童が「学校が楽しい」と肯定的に回答しているが、昨年より8%減っている。「学校があまり楽しくない」(15名)と回答している児童がいる。「学校が全く楽しくない」と回答した児童は4名で、どちらも昨年に比べて増加している。90%の児童が「先生は、あなたのことを分かっている」と回答し、これは昨年と変わらない。「学校は、子どもや保護者の相談に積極的に対応しているか」には、保護者の約90%が肯定的に捉えている。「学校が楽しくない」と児童が回答している要因として学業面でのストレス・友人関係・生活リズムの乱れ・集団生活へ負担などが考えられる。今一度各学級担任が自らの学級経営を振り返り、これまで以上に児童の気持ちに寄り添い、仲間づくりを中心に据えた学級経営を行い、保護者との連携をさらに深めていく。	B	・今後も児童理解の時間を設け、全教職員で共通理解を図り、児童の指導・支援に生かしていく。 ・面談や電話連絡、連絡帳等を通して、保護者との連絡を密にし、ともに児童の成長を促す。 ・「チーム林」として校内支援体制を構築し、ケース会議を適宜行い、関係機関との連携を図る。 ・アンケートに理由を記入するようにし、具体的な改善を図る。	A
	教職員の資質向上	授業力の向上 組織力	93%の児童が「授業で教えてもらったことが分かる」と答えている。保護者の91%が「学校は分かる授業をするために工夫している」と回答している。教職員は日々教材研究に努め、わかる授業を実践している。「自分から進んで発表できている」と回答した児童は、56%で昨年より12%減少している。「分からない問題があると質問したり、調べたりしている」と回答した児童は、65%である。「主体的・対話的・深い学び」となる授業に向けて授業改善に取り組む必要がある。組織力については、教職員の100%が「教職員がよくまとまり、それぞれが役割を果たしている」と回答している。今後も教職員が一丸となって、児童の指導にあたりたい。	B	・校内研修の充実を図り、教職員一人一人の授業改善や指導力向上に取り組む。 ・学級ごとに学習課題を把握するとともに、学校全体で共通理解を図り、学習規律の定着と学習意欲の向上を図る。 ・ミドルリーダーの育成と若手教員の授業力向上を図るため、メンター制度の充実を図る。	B
	環境整備	安全できれいな教育環境の整備	児童の84%が「時間いっぱい一生懸命そうじができています」と回答している。日課表の見直しを図ったり、「無言清掃」の時間を設けたりしたが、R5年は93%、R6年は89%と近年減少している。掃除に対する意欲の低下、技術認知的な理由（やり方がわからない）などが考えられる。掃除の意義指導だけでなく、児童の掃除に対する意欲を高められる活動に取り組む。98%の保護者が「学校はよく清掃され、掲示や花壇などきれいな環境である」と回答している。地域の方も落ち葉を掃いてくださったり、体育館や学校周辺の環境整備に配慮してくださったりしている。	A	・清掃時間の取組について、教職員で見直しを図り、縦割り班で掃除をしたり、掃除名人をみつける活動をしたり児童の掃除に対する意欲を高められる活動に取り組む。 ・委員会活動（保健委員会・環境委員会等）を中心に、計画を立て、全校児童で活動できる取組を取り入れる。	A
教 育 活 動	学力向上	基礎・基本の定着 学習意欲	児童アンケートでは「進んで読書している」がR4年の63%からR5年では「読書タイム」や「本借りデー」を取り入れ85%と大幅にポイントが増えた。R6年は83%とポイントを維持していたが、今年は、69%と大幅にポイントが減った。「読書タイム」や「本借りデー」は継続し、読書活動の充実を図ったが、マンネリ化が浮き彫りになった。「家庭で読書を自分から進んでしている」と答えた保護者は、R6年の83%から今年は67%と同様に減少している。「家庭学習に進んで取り組んでいる」と回答した児童はR6年は84%であるが、今年は78%と減少している。保護者は、R6は64%で今年は50%と減り、児童と28%の開きが見られた。引き続き、家庭との連携を図りたい。	B	・朝の読書時間を確保しつつ、ペア読書や読書まつりなど読書活動を活性化し、マンネリ化を防ぐ。 ・家庭読書の充実を図るために、週末読書や親子読書を取り入れ、家庭との連携を図る。 ・本校の実態に応じた「学力向上実行プラン」を設定し、それに基づく具体的な実践を全教職員で共通理解し行う。	B
	心の教育(人権教育)	人権尊重の精神の育成 いじめ防止	94%の児童が「友達を大切に、仲良くできている」と答えている。各学年の児童の実態に応じた取組が児童の人権意識の高まりにつながっている。保護者アンケートでは「学校はいじめや差別のない仲間づくりに努めている」の回答が88%と昨年より5%減っているが、「学校は、命の大切さや一人一人を大切にする教育をしている」と回答したのは95%と昨年より増えている。参観日での人権学習の公開や「命の授業」への取組、日々の実践や児童の意見を学年だより等で発信したことが保護者への啓発になっているが、日常の児童の姿として行動化するまでは至っていないことがうかがえる。	A	・「林小かがやき委員会」の活動を活性化し、継続的に活動することで、学校全体で人権意識の高揚や仲間づくりを進め、学校での取組を保護者や地域へ発信し、啓発につなげる。 ・校内研修の充実を図り、教職員の人権教育に関する知識・技能の向上に努める。	A
	生徒指導	遵法精神の育成	きまりの遵守や善悪の判断については、児童の91%、保護者の92%が「できている」と評価している。教職員アンケート「子どもに善悪の判断をつけさせ、きまりを守る指導ができています」には、約80%の教職員が「できている」と回答しており、児童・保護者の意識と教職員の意識の間にずれが生じている。ロールモデルがなく目標設定が曖昧になっているのではないかと考えられる。また、善悪の判断は、普遍的な面がある一方で、捉え方や考え方、価値観などの多様化により、以前の常識が通用せず、絶対的な「正解」が見えにくい状況である。きまりの遵守、善悪の判断等については、具体的な場面や言動をもとに自分事として考えられるように指導を徹底していく。	B	・朝会や学校だより等で学校のルールの周知徹底を行う。 ・道徳の学習を中心に学校の教育活動全体を通して、きまりの遵守、善悪の判断等について具現化して、指導する。 ・育成センターや警察などの関係機関との連携を深め、スクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカー等の外部人材にも引き続き支援をお願いする。	B
	健康・体力づくり	基本的な生活習慣の確立 運動習慣の定着	「早寝早起き」については「できている」と回答した児童は、近年増加R6は79%で近年ポイントは増加していたが、今年は、57%(保護者:56%)と大幅に減少している。「毎朝ご飯を食べている」児童は73%で、保護者は82%で相違がある。朝ご飯を準備していても時間が足りず十分食べられなかったり、子どもだけで食べて保護者が確認していなかったりすると考えられる。「進んで運動している」と回答した児童は70%、保護者は63%である。学校では、「はやしっこ元気体操」に取り組んだり、外遊び事業に参加をしたり、運動習慣の改善に向けた活動充実を図った。保健の取組アンケートの「自分の運動習慣についてどう思うか」では、「なおしたい」と思う児童が4～6年生で4割いることから、取組から「体を動かすことの大切さ」の意識の高まりは見られる。しかし、実際に「体を動かす」モチベーションには至らなかったり、目に見える結果がなかなか得られなかったりすることから行動に移せられないと考えられる。全国的にも肥満傾向児童の増加が大きな問題となっており、本校も例外ではない。行動化にうつせるシステム・環境づくりと保護者の連携が必要である。	B	・生活習慣きりチェックシートを活用し、自分の健康課題を自覚し、改善策を考え実行するとともに、家庭と連携した取り組みを継続する。 ・「はやしっこ元気体操」の継続、外遊びやサーキットトレーニングの推奨に努める。 ・縦割り班活動を朝の活動や休み時間に取り入れ、児童の運動習慣確立に努める。また水泳カード・なわとびカード等を効果的に活用する。 ・引き続き徒歩通学、外遊びを奨励する。	B
	安全教育	危機に対処する能力の育成	「災害や不審者があらわれたときに自分の命を守る方法を知っている」と回答した児童は95%で、保護者アンケートの「学校は、災害や不審者などから自分の命を守る方法を子どもに伝えているか」には90%の保護者の方が「そう思う」と肯定的に答えている。今年度は地震・火災訓練や防犯教室などを計画的に行うことができた。また、避難訓練の事前指導を行い、全児童・職員に振り返りを行うことで防災意識を高めることにつながった。	A	・今後も関係諸機関と連携を深め、協力を得ながら多様な訓練を実施し、取組を保護者に伝えたり、参観日に実施したりして啓発に努める。	A
情報モラル教育	情報社会の倫理安全への知恵	「あなた(お子さん)は、家庭や学校のルールを守ってSNS等やゲームをしているか」に児童は84%ができていると回答し、保護者は83%がそう思うと答えている。「学校は、きまりを守ってタブレットなどを気をつけて使うように子どもに伝えているか」には、88%の保護者が「とてもそう思う」「そう思う」と答えている。阿波吉野川警察署生活安全課の方のSNS等の使い方の出前授業や情報教育主任からの朝会や終業式等での全体指導などを行った。しかし、「あなたは、きまりを守り、相手の気持ちを考えてタブレットやスマホを使ったり、ゲームをしたりできているか」に5%(8名)の児童がまったくできていないと答えている。学校での情報モラル教育の徹底と保護者への啓発は引き続き行っていく。	B	・発達段階に応じた情報モラル教育を計画的に進める。 ・情報モラル教育の公開授業、スマホ・ケータイ安全教室や講師による出前授業の実施を通して、児童の倫理意識の改善や保護者の参加を促して、啓発につなげていく。 ・ICT支援員を活用し、児童の実態に合わせた情報教育に取り組む。	B	

4 学校運営協議委員さんからのご意見

- ・学校経営面や教育活動についても様々な取り組みの工夫が、感じられた。
- ・出前授業を積極的に取り入れてほしい。例えば、体育（総合型スポーツ）、性教育、食育、人権コンサートなど。
- ・児童のスマホ等、SNSの使い方について、参観日に出前授業等を取り入れるなど保護者への啓発を行い、情報共有を図っていく必要がある。
- ・「学校が楽しい」は、児童にとって抽象的で何をもって楽しいかイメージできないので、数値化して評価するのは難しい。具体的な項目を設定してみてもどうか。（例えば、「友達と学校で遊ぶのが楽しい」「学校でみんなとIPPYに勉強するのが楽しい」「運動会など学校行事が楽しい」など）
- ・ホームページについて、「保護者が望んでいる情報は何か」「ニーズにあっているのか」の点検が必要だ。
- ・学年だよりに担任の思いや考えが反映される工夫をしてほしい。
- ・『読書活動』と『体力づくり』の兼ね合いが難しい。教室で本を読んでいると、「外で元気に遊びましょう」と声をかけるというように矛盾が生じる。
- ・スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカーを積極的に活用してほしい。

5 総合評価

昨年度よりポイントが減少した項目がみられた。特に、読書活動については、取り組みのマネリ化があらわれている。児童の実態を把握し、課題を洗い出し、教職員で共通理解を図る必要がある。それぞれの教職員の強みを活かした教育活動を充実させ、学校の活性化を図っていく。どの活動も意識としては高まっていますが児童の姿としてあらわれてない面がある。目標設定を「具体化」「見える化」し、児童自身が「やった」「できた」とわかる工夫がいる。「学校が楽しくない」と回答している要因として学業面でのストレス・友人関係・生活リズムの乱れ・集団生活への負担などが考えられる。しかし、93%の児童が「授業で教えてもらったことが分かる」と回答し、90%の児童が「先生は、あなたのことを分かっている」と回答し、これは昨年と変わらない。また、今年度のいじめアンケートの結果は、昨年度より件数が減っている。このことから、学業面では、児童が受け身で、主体的に学習しようとする意欲が高まっていないことがうかがえる。また、友人関係や先生との関係性は友好的であるが、閉鎖的であり、新しい人間関係をつくろうとする思いは少なく、仲間意識がなかなかもてない環境にある。生活リズムの乱れもアンケート結果から見られる。

家庭への啓発は、どの取組においても必要不可欠である。しかし、学校の働きかけなくして改善は望めない。学校だけでなく地域や関係機関との連携を図り、協力を得ながら取組を進める。児童の実態や保護者のニーズを常に把握し、児童の実態に合った取組を実施し、PDCAサイクルを行う。課題・問題があれば「チーム林」として迅速かつ柔軟に対応し、児童・保護者との信頼関係を構築していく。